

現 地 通 信

マレーシア連邦の 総選挙(1969)について

口 羽 益 生*

I 連盟党の後退とクアラルンプール 暴動

思いがけないことが起こった。今回の総選挙で与党の連盟党(Alliance Party)の得票数が大幅に減った。野党の伸び様は、予想外であった。人びとは興奮した。この興奮がさめきらないうちに、クアラルンプールで暴動が起こったのである。

5年ごとに行なわれる国民議会(Dewan Ra'ayat¹⁾)と州議会の総選挙の投票日は5月10日であった。投票に時間のかかる東マレーシア²⁾(サバ・サラワク 2州)と1人の立候

* 竜谷大学文学部

1) マレーシア連邦の議会制は、英国やインドの制度をモデルにした二院制である。上院(Dewan Negara)は各州議会の推薦する2名と国王の任命する各界の代表者32名、合計58名の議員によって構成される。下院(Dewan Ra'ayat)は、1名定員制の選挙区から直接選挙で選ばれる144名の代議員によって構成される。内閣は、下院で多数を占める政党で組織され、下院に責任を負う。上院は法案の成立を一時遅らせるぐらいの力しかない。

2) 1966年から、サバ、サラワク 2州は東マレーシア、マラヤは西マレーシアと公式に呼ばれるようになった。

補者の死亡によって投票日の延期されたマラカ州の1選挙区(Melaka Selatan)を除き、翌11日の夕刻には、大勢はほぼ定まった。

14年来圧倒的多数を誇っていた連盟党の後退が特に目立った。すでに選挙前から野党³⁾の得票率の伸びは、あるていど予想されていた。しかし、国民議会選挙の有効投票総数の半数を上回るほど伸びるとは考えられていなかった。州議会選挙でも、野党はクランタン、ペナン、ペラの各州議会で過半数の議席を占め、スランゴール州では、与野党の議席数は同数となった。野党支持者は、思いがけない勝利に沸き返り、与党は、3人の有力閣僚が落選、Abdul Rahman 首相をはじめとする主要閣僚の得票数も大幅に減って沈滞した。

サバ州での連盟党系無投票当選者10名を加えると、連盟党は、すでに国民議会で過半数の議席(144議席中76)を確保している。しかし、不敗の連盟党のイメージは一夜のうちに崩れ去った観のあったことは否定できない。Abdul Rahman 首相の地元ケダ州で行なわれた連盟党の戦勝祝賀パーティで、同首相は選挙結果に失望したと語った。この失望は、マレーシアの父と呼ばれ、選挙運動の第一声で、今回の総選挙は自分にとって最後のものになるかと語り、引退を示唆して、全国を遊説して回った同首相の実感であったに違いない。11日のマレーシアは、かなり興奮した状

3) 主な野党

PMIP=Pan-Malaysian Islamic Party
汎馬回教党

DAP=Democratic Action Party
民主行動党

GRM=Gerakan Ra'ayat Malaysia
民政運動党

PPP=People's Progressive Party
人民進歩党

PR=Party Ra'ayat 人民党

LP=Labour Party 劳工党

表 1 西マレーシア国民議会・州会選挙結果
(1969年5月13日現在)

政 党 名	年 度	国 民 議 会			州 会		
		1959	1964	1969	1959	1964	1969
Alliance		74	89	66	207	240	167
PMIP		13	9	12	42	25	40
DAP			1	13			31
GRM				8			26
PPP		4	2	4	8	5	12
P R							3
無 所 属		3			5		3
(S F)			2		16	8	
(UDP)			1			4	
(P N)		1			4		
(M P)		1					
		104	104	103*	282	282	282

* 1名未定

() の政党は現在はない。SF=Socialist Front, UDP=United Democratic Party, PN=Party Negara, MP=Malayan Party

態に置かれたのである。

特に連盟党の中国人系下部組織である馬華公会 (MCA)⁴⁾ は惨敗した。11日には、ペラ州中国人商工会議所の Yap Yin Fah 幹事 (元 MCA の広報部長) は、「Tan Siew Sin 会長は辞任すべきだ」と語っている。こうした MCA 内部での突き上げもあって Tan Siew Sin 会長は13日に、「MCA は責任を取って、連盟党の内閣に閣僚を出さない。従来通り連盟党には留まるが、議会活動を通じて選挙民の支持にこたえる。」と談話を発表した。この談話は、MCA 支持者にとって、新内閣に中国人系の利益代表者がいなくなることを意味する。

クアラルンプールで暴動が発生したのは、この談話が発表された13日の夕刻である。直

ちに非常事態が宣言され、スランゴル、ペラ、ヌグリスンビラン、ペナンの各州とケダー州の南部に、22～24時間の外出禁止令がしかれた。暴動の中心地は、スランゴル州のクアラルンプールとプタリンジャヤで、14日、ラジオは、死者39名、負傷者114名、焼却された家屋14戸、破壊された自動車41台と被害状況を報じたが、その数は日を経るにつれて増加した。選挙の興奮に代わって、ラジオ放送の伝える緊急感が暴動拡大の不安を全国に広めた。複合民族国家の基盤のよろさが痛感された。

14日の夜には、治安回復のため、ほとんど無制限の権限が与えられる最高決定執行機関、国家作戦会議 (National Operations Council) が、政府、軍、警察の代表者によって組織された。議長には、選挙後、数日の間沈黙していた連盟党の次期党首と一般に考えられている Abdul Razak 副首相が首相によって任命

4) 連盟党 (Alliance Party) は、統一マレー人国民組織 (United Malays National Organization) と馬華公会 (Malaysian Chinese Association)、マレーシア・インド人会議 (Malaysian Indian Congress) の三者の連合政党である。

された。⁵⁾

暫定非常時内閣の組閣もはじめられたが、真っ先に起用されたのは、連盟党のマレー人系下部組織、統一マレー人国民組織 (UMNO) の第3の実力者といわれる Ismail bin Dato Abdul Rahman 氏で、内務大臣に任命された。他の閣僚の名はなかなか発表されなかったが、20日になって、やっと閣僚の名は発表された。⁶⁾ MCA は、いちおう非常時内閣に参加することになった。再選された Tan Siew Sin 前蔵相、Khaw Kai Boh 前自治・住宅相、Lee Siok Yew 前教育次官の MCA の3人のリーダーには、無任所相として特別の任務が与えられることになり、Lee San Choon 前労働首席次官は、無任所次官に任ぜられた。

私の滞在しているケダー州のアロルスターでは、何事も起こらなかった。しかし、無気味な緊張感が漂っていた。14日からは、新聞

の配達はなかった。クアラルンプールとペナン間の交通が止まったのである。16日には、どの店に行っても卵は売り切れていた。外出禁止令がしかれることが予想されて、買いだめが行なわれたのである。

ラジオは、暴動発生後、音楽とニュースと政府の通告のみ放送し、15日には、報道管制がしかれて、16・17日の両日は、全新聞の発行が停止された。政府の要人は、ラジオを通じて、暴動は攪乱分子によるものであると報じていたが、具体的に何がどこで起こったかについては、何も説明されなかった。

いろいろな噂が流れた。いわく、「反政府分子が UMNO の本部に火炎びんを投げ込んで、軍が出動し、多くの中国人が殺された。それに怒った秘密結社員がマレー人地区の家を焼き、路上の自動車を破壊した。」「中国人秘密結社員が軍の兵舎から大量の武器弾薬を盗んだ。」「死者は500名ぐらいで、負傷者は

5) 国家作戦会議の構成員は、17日に次のように発表された。

Tun Hj Abdul Razak bin Dato Hussein
(副首相)

Tun Tan Siew Sin (MCA 会長)
Tun Ismail bin Dato Abdul Rahman
(内務相)

Tun V.T. Sambanthan (MIC 会長)
Hamzah bin Dato Abu Samah
(情報・放送相)

Tungku Osman bin Tungku Mohammed
Jewa (参謀本部長)

Tan Sri Mohamed Salleh bin Ismail
(警視総監)

Tan Sri Abdul Kadir bin Samsuddin
(公共事業長官)

Tan Sri Ghazali bin Mohamed Shaffie
(外務次官)

Tungku は王族の敬称。Tun は一般市民に与えられる最高勲等 (orders of chivalry, 1st class) の第1, 2位保持者に対する敬称。Tan Sri は第3, 4位保持者に対する敬称。Dato は主に州の sultan によって与えられる1等級, 2等級の勲位保持者に対する敬称である。しかし国王によって与えられる2等級の勲位保持者も Dato と呼ばれる。

6) Tungku Abdul Rahman Putra Al-Haj
首相, 外相, 文化・青年・スポーツ相

Tun Abdul Razak bin Dato Hussein
副首相, 国防相, 蔵相

Tun Ismail bin Dato Abdul Rahman
内務相

Tun Tan Siew Sin 無任所相 (前蔵相)

Tun V.T. Sambanthan 通信相

Tan Sri Sardon bin Hj Jubir
保健相 (前運輸相)

Mohamed Khir bin Johari
商工相, 自治・住宅相 (前教育相)

V. Manickavasagam 労働相, 運輸相

Hj Mohamed Ghazali bin Hj Jawi
農務・共同組合相

Dato Hj Abdul Rahman bin Ya'kub
教育相 (前地鉦相)

Abdul Ghafar bin Baba
国家村落開発相, 地鉦相 (前無任所相)

Dato Ganie Gilong 司法相 (前サバ相)

Hamzah bin Dato Abu Samah
情報・放送相 (前内務次官)

Tan Sri Temenggong Jugah サラワク相

Khaw Kai Boh 無任所相 (前自治・住宅相)

Lee Siok Yew 無任所相 (前教育次官)

Tan Sri Fatimah binte Hashim 社会福祉相

1,000名ぐらいである。」「マラカでは、Tan Siew Sin の家が焼き打ちされた。」こんな噂の真相は突き止めようがなかった。州政府の要人ですら真相は判らないと言っていた。クアラルンプールと北西部の間の航空、鉄道、タクシーは、14日に止まって20日頃まで正常な状態に戻らなかった。

しかし、暴動がかなり大規模なものであることは、ラジオ放送が示唆していた。いわく、「輸血のために至急献血者を求む。どこどこに電話をすれば車が送り迎えをする。」「クアラルンプールの医者全員待機していて欲しい。」「未連絡の大学病院の医者や看護婦は全員至急、病院に連絡せよ。」「クアラルンプール市民防衛団員は、最寄りの警察署に至急連絡せよ。」「福祉省の活動のため、官吏の中からボランティアを求む。」「軍からすでに除隊した25才以下の者で、再志願を希望する者は、最寄りの部隊に連絡せよ。」「93名のテロリストがマラカで逮捕されたから安心せよ。」等々。

18日になって、事態はかなり落ち着きを取り戻した。各地の外出禁止時間も短縮されるようになった。新聞も配達されるようになった。しかし、暴動の具体的な記事は一行も新聞に載っていなかった。

Ismail 内務相はラジオを通じて、最初、暴動の原因は野党の扇動によると報道したが、16日の夜には、Abdul Rahman 首相は、ラジオで、すべては共産党のテロリストによるものであるときめつけた。しかし、17日には前日の言を取り消して、同首相は、暴動は左翼攪乱分子と中国人の秘密結社によって雇われた saboteur などの悪質分子 (bad elements) によって計画的に起こされたものであると説明し直した。そして「当選していたら自分も殺されたであろう」という MCA の落選議員の言を引用して、暴動は中国人同志の対立によるものであると示唆した。さらに、今回の

選挙で、マレー人は与党の統一マレー人国民組織 (UMNO) と野党の汎馬回教党 (PMIP) に2分されたので、悪質分子は、この機会に騒動を起こすため、サバ、サラワク両州でも同じことを計画していることが判明したから、両州の選挙は延期する、と付け加えた。

労工党 (Labour Party) をも含めた諸野党は、いちおう政府の対策に賛意を表明し、協力すると言明した。しかし、主な野党のリーダーがテレビを通じて国民に訴えるという申し出は、首相によって拒否された。22日には、全政党の機関誌は発行を禁止され、クアラルンプール暴動について報道している米国の Newsweek と Time 誌は、事実を曲げて伝えているとの理由で、国内での発売を禁止された。

5月30日現在までの被害状況は、死者177名、負傷者339名、焼却された家屋135戸、破壊された自動車116台、逮捕5,680名（このうち悪質分子は1,621名、その他は外出禁止令違反者、噂流布者、武器携帯者）、またクアラルンプールの Stadium Negara と Merdeka Stadium への避難者は約5,000名であると政府は報じている。⁷⁾ 逮捕された者のうちには、今回の総選挙で当選した者もいるらしいことは、民主行動党 (DAP) や民政運動党 (GRM) のリーダーの抗議談話から推察される。

総選挙における連盟党の後退とクアラルンプール暴動の二つのでき事は、選挙前には全く予想されていなかった。それは突発的なでき事のようにさえ思える。しかし、今回の選挙で野党の得票が大幅に伸びても不思議ではなく、伸びなければおかしいと思われるような事どもも、いたるところで見聞された。つまり、上記の二つのでき事を突き詰めてゆくと、複合民族国家としてのマレーシア連邦が現在直面している諸問題が浮き彫りにされ

7) 6月3日現在、死者、負傷者、逮捕者の数はさらにふえているが、その数は不明。

るように思える。クアラルンプール暴動発生の具体的な経緯は、いまだに判然としない。しかし、今回の総選挙で連盟党は、どこでなぜ後退したのかを分析すれば、どこに、なぜ暴動が発生するような緊張状態が横たわっていたか、ぐらいのことは見当がつこう。こんな視角から、今回の総選挙について、やや詳細に現地から報告することにしよう。

II マレーシアの政治（1945—1969）

この国の政治は非常に複雑である。統一国家としての歴史が浅く、複合民族国家としての性格上、国内政治は、国際情勢や近隣諸国の政治情勢を敏感に反映して変化する。しかし、第2次世界大戦後、この国が抱えている問題は、本質的に変わっていない。その辺の事情をまず簡単に説明しておこう。⁸⁾

マレー半島部は、18世紀の末頃から第2次世界大戦の勃発まで、さまざまな形のもとに英国の支配下にあった。シンガポール、ペナン地区、マラカは、英国の直轄植民地（Crown Colony）であった。パハン、ペラ、スランゴルとヌグリスンビランは、連邦マレー州（Federated Malay States）として、クアラルンプールを中心に、やや直接的な中央集権的統治下に置かれた。残るジョホール、クランタン、トレンガヌ、ケダ、プルリスの各州は、非連邦マレー州（Unfederated Malay States）として、英国人の adviser はいたものの比較的自由な形で自治を保っていた。

この歴史的事実は、現在でもマレーシアが抱える基本的な諸問題の基盤となっている。直轄植民地は早くから開化したし、連邦マレー州は、植民地経済の重要地域として、主に19世紀後半から来住した中国人やインド人労

働者によって開発された。非連邦マレー州には、自給自足的農漁業に従事するマレー人が多く、極端な表現をすれば、自治はあったが放置されていた地域である。その結果、この3地域の間には、人口、経済、教育水準の上で、かなりの地域的格差が現われ、それは現在でも続いている。

移民して来た中国人やインド人は、常に祖国から教員を補充して教育を進め、時代の流れに順応できたが、マレー人には、広い世界の動きに接する制度も窓口もなかった。したがって、マレー人と他の民族との経済的格差も拡大していった。しかも、第2次世界大戦を契機に高まった民族主義は、諸民族の距離感をいっそう強める結果になった。第2次大戦後、マレーシアの政治に一貫して見られる最大の問題は、諸民族間、特に人口の多いマレー人と中国人間の力のバランスの問題である。

この民族間の力のバランスの問題が、政治問題として強く現われはじめたのは、1946年からである。その年、英国はマラヤ全州（シンガポールを除く）の連合体（Malayan Union）の確立を提案した。この提案は、各州のスルタンの権限を弱め、中国人、インド・パキスタン人にも平等の市民権を与えるものであった。しかしこれは、ジョホール州政府の元首相 Dato Onn bin Ja'afar をリーダーとするマレー人の強い反対に出会って廃案になった。

マラヤの中国人は政治に無関心であったといわれる。Malayan Union 案が簡単に廃止されたのは、そうした中国人の政治に対する無関心さによるとも言われているが、当時、すでに活発になっていた中国人を主とする共産ゲリラ活動のために、英国人の対中国人感情は、あまり好ましいものではなかったという事情もあろう。交渉は主にマレー人となされ、この時に結成されたマレー人の組織が、

8) 東マレーシアでは、総選挙も終わっていない上、政治的にも西マレーシアとは、やや異なった問題をかかえているので、この報告では、西マレーシア（マラヤ）を中心に扱う。

表2 マレーシア連邦民族別人口比 (1960)

地 域 民 族	マ ラ ヤ	サ ラ ワ ク	サ バ	マレーシア
	%	%	%	%
マ レ ー 人	50	17	6	45
他 の 土 着 人	—	51	68	8
インド・パキスタン系・ その他	13	1	3	11
中 国 人	37	31	23	36
計	100	100	100	100
1960年 推 定 人 口	7,018,000	744,529	454,421	8,216,950
1966年 推 定 人 口	8,415,488	886,834	577,812	9,880,134

[注] サバ、サラワクの民族別人口比は、Tom Harrison ("The Peoples of North & West Borneo," in *Malaysia* ed. by Wang Ganwu, 1964, p. 177.) の分析による。1960、1966年の人口は、*Monthly Statistical Bulletin of West Malaysia*, Ogos, 1968; *Official Year Book*, 1967. による。

現在の連盟党の主軸 UMNO である。UMNO を中心にでき上がった代案がマラヤ連邦 (Federation of Malaya) 案である。

中国人の間にも新しい組織ができ上がる。第2次世界大戦中には、抗日活動に力を注ぎ、戦後は英国の復帰に強く反対したマラヤ共産党は、中国本土の政治情勢を強く反映した中国人の政党であった。現在でも、この党員は Ch'in P'eng をリーダーとして、タイ・マラヤ国境のジャングルに潜んでいるといわれているが、戦後、共産党のゲリラ活動が活発になるにつれて、これに対抗する中国人団体 MCA が、1949年に古くからの中国人移民で、マレー文化を身につけた富裕層を中心に組織された。リーダーは、マラカ出身の Tan Cheng Lock (Sir Cheng Lock Tan) であった。MCA は、1952年のクアラルンプール市会の選挙の時に、UMNO と合体して、連盟党 (以下 Alliance) を結成したが、これが、現在の与党の母体であった。この母体に、1955年の総選挙の直前、マレーシア・インド人会議 (Malaysian Indian Congress,

以下 MIC と略記) が加わって、現在の Alliance ができ上がる。しかし、Alliance の内部で常に問題になるのは、組織の力と人口比の関係上、UMNO と MCA の力関係である。

マラヤのような複合民族社会では、民族間の慣習や平均的な経済的地位があまりにも異なるので、民族共同体の枠を越えた政党を結成することは非常に困難である。この点、Alliance は、3民族の利害代表による妥協の産物である。さいわい Alliance は、この妥協の成立によき人を得ている。UMNO の最初のリーダー Dato Onn は、個人的な野心もあって、非マレー人に対し非常に寛容な政策を提案し、下部の突き上げにあって失脚する。代わって、1951年に現 Abdul Rahman 首相が UMNO 党首として迎えられ、Alliance の総裁となった。同首相の温和で社交性に富んだ人柄は、人びとに好感を与え、その決断力と政策決定のタイミングの良さは、人びとに信頼感を与え、Alliance を批判する人のなかでも、同首相を批判する人は少ない。

Alliance 内部の最初の最大の妥協の一つ

は、UMNO と MCA の間の妥協である。マラヤ連邦の憲法草案作成に際して、マレー人優位を中国人は認める代わり、多くの中国人にも市民権を与えるという妥協である。この妥協の前提は、中国人はマレー人よりも経済的に優位にあるという発想である。現在でもこの前提は変わらない。今回の総選挙でも、Tan Siew Sin 現 MCA 会長は、マレー人優位の諸政策を中国人は認めねばならないと説明していたし、Abdul Rahman 首相も、マレー人優位の政策は、マレー人が比較的貧しいから当然であると説いていた。

マレー人優位が、どんな形で政治の上に表現されているかといえば、(1) 国家元首、州の支配者 (sultan と governor)、軍や警察の要職はマレー人に与えること、(2) イスラム教を国教とすること、(3) 1967年を目途にマレー語を公用語とすること、(4) 公立中学校以上の学校教育は原則として、マレー語と英語で行なうこと、(5) 独立前までのマレー人の所有地は、他民族に売却してはならないこと、(6) 公務員のポスト、奨学金、商工業部門のライセンスは、マレー人に優先的（3対1の割合）にまわすことなどである。サバとサラワクがマレーシア連邦に加入してからは、マレー人優先の概念は、サバ・サラワクの他の土着民をも考慮に入れて、bumi putra（土地の子）優先の概念に置き換えられつつある。

マラヤでの最初の総選挙が行なわれたのは1955年である。この選挙は、マラヤ連邦の独立交渉をすすめるための暫定政府担当者を選出する選挙であった。この時から、反Alliance 政党の主張は、上記の UMNO と MCA の妥協の原則への批判を基盤にしたものであった。1955年の選挙では、Alliance が完勝している。（表3 参照）

マラヤ連邦独立（1957）後の最初の総選挙（1959）では、多少事情が異なってくる。選挙前に、Alliance 内部での UMNO と MCA

の対立が強くなる。MCA の候補者の数の割当てが少ないのを不満として、若干の中国人は MCA から身を引いた。その中には、Tan Cheng Lock の後を継いで MCA の会長になったペナンの Lim Chong Eu も含まれている。Lim Chong Eu の後に MCA 会長に就任したのが、現 MCA 会長の Tan Siew Sin で、Tan Cheng Lock の息子である。Tan Siew Sin の努力で、Alliance 内部の対立は解消するが、1959年の総選挙では、Alliance の得票率は前回の選挙時の79.6%から51.8%に下落する。しかし、野党の戦略がまずく、Alliance は104議席中74議席を占める。

この総選挙から、野党の地域的地盤が明確となる。すでに述べたように、マラヤの北部4州（プルリス、ケダー、クランタン、トレンガヌ）では、マレー人人口が比較的多く、開発が遅れている。この地域では、汎馬回教党（以下 PMIP と略記）が強い。当時の PMIP 党首 Burhanuddin は、かつてのマレー民族主義政党 MNP (Malay Nationalist Party) の党首であった。MNP は、社会主義を容認し、マレー人のためのマラヤ、インドネシアとマラヤの統一併合という思想の強い政党であった。しかし、社会主義は、イスラム教の強いマレー人の間で受け容れられず、MNP は衰退してしまった。現在でも PMIP は、MNP の流れを汲む政党といわれ、現 PMIP 党首 Mohamed Asri bin Hj Muda（クランタン州首相）は、元 MNP の党員であった。1959年の総選挙では、PMIP は、北西部（プルリス、ケダー）では、Alliance に完敗するが、北東部（クランタン、トレンガヌ）では快勝して、州議会でも多数を占めた。

1957年に結成された社会主義政党 SF (Socialist Front) が強い州は、ペナン、スランゴル、バハンとジョホールである。この政党は、中国人系の労工党 LP (Labour Party) とマレー人系の人民党 PR (Party Ra'ayat)

表3 国民議会における州・政党別得票数

年 度 州 名	Allianceの得票率				最大野党の得票率			与野党議席数					
	1955	1959	1964	1969	1959	1964	1969	1959		1964		1969	
								与	野	与	野	与	野
Perlis	66.8	59.6	63.2	54.8	PMIP 40.4	PMIP 36.8	PMIP 45.2	2		2		2	
Kedah	92.8	65.1	68.6	53.4	PMIP 26.8	PMIP 25.1	PMIP 41.1	12		12		9	PMIP 3
Kelantan	78.1	31.4	42.9	47.5	PMIP 68.3	PMIP 56.8	PMIP 52.4	1	PMIP 9	2	PMIP 8	4	PMIP 6
Terengganu	84.9	37.4	56.5	50.0	PMIP 47.6	PMIP 32.1	PMIP 50.0	1	PMIP 4, PN 1	5	PMIP 1	4	PMIP 2 GRM 5, DAP 1
Penang	79.1	44.0	47.3	36.9	SF 38.2	SF 31.6	GRM 44.5	5	SF 3	6	UDP 1, SF 1	2	
Perak	70.5	49.6	55.6	43.2	PPP 26.9	PPP 16.6	PPP 18.8	15	PPP 4, IND 1	18	PPP 2	9	DAP 5, PMIP 1 PPP 4, GRM 1
Pahang	90.0	66.9	71.1	60.8	SF 21.4	SF 18.2	PMIP 24.4	6		6		6	
Selangor	71.2	44.3	53.9	44.0	SF 30.4	SF 31.8	DAP 31.4	9	SF 5	12	PAP 1, SF 1	9	DAP 3, GRM 2
Negri Sembilan	83.9	51.9	59.1	46.2	PMIP 16.7	SF 22.0	DAP 36.2	4	IND 2	6		3	DAP 3
Melaka	87.9	58.9	66.2	45.2	PMIP 16.1	SF 26.8	DAP 22.8	3	MP 1	4		2	DAP 1
Johor	86.1	65.7	71.7	68.6	SF 14.2	SF 22.2	DAP 21.5	16		16		16	
計								74	30	89	15	66	37*

* Melaka で1名未定

[注] 1955, 1959, 1964年度の資料は, K. J. Ratnam & R. S. Milne, *The Malayan Parliamentary Election of 1964, 1967*; 1969年度の資料は, *The Straits Times* (1969年5月12日) による。

の連合政党である。社会主義、企業の国営化、階級・民族の平等化を主張して、主に都市労働者（中国人）と知識人の支持を得た。

他の野党で目立つのは、民族間の平等を説く、ペラの州政党ともいわれる人民進歩党 PPP (People's Progressive Party) である。インド人兄弟 Seenivasagam をリーダーとし、ペラ州では、インド人、中国人の強い支持がある。

1955年と1959年の総選挙は、共産ゲリラ活動のための非常事態宣言下で行なわれたものであるから、与党の Alliance には、かなり有利な条件を伴った選挙であった。しかし、共産ゲリラの脅威も弱まってきた1959年の選挙では、PMIP と SF が、かなりの伸びを示している。1960年には、非常事態宣言も解除される。しかし、1964年の総選挙には、Alliance をさらに有利な地位に置く外的条件があった。それは、インドネシアのマレーシア連邦対決政策である。この条件は、PMIP と SF の伸びにはきわめて不利であった。

1959—1964年のマラヤにおける政治で注目すべきできごととは二つある。一つは、インドネシアの対決政策の硬化に伴う野党の後退である。他の一つは、マレーシア連邦の結成によって、シンガポールの政党、人民行動党 PAP (People's Action Party) がマラヤに進出してきたことである。

1959年の総選挙の後に活動を続けた野党は、PMIP, SF, PPP, 国家党 (Party Negara)⁹⁾ と Malayan Party である。このほかに、二つの新党が結成された。一つは、MCA 会長から身を引いた Lim Chong Eu を中心にペナンで1962年に結成された統一民主党 UDP (United Democratic Party) である。もう一つは、マレー人優先を主張しすぎて、農相の

9) Party Negara は UMNO をやめた Dato Onn によって1954年に結成されたワンマン政党である。

地位を追われた Abdul Aziz bin Ishak によって、1963年に結成された国民議会党 NCP (National Convention Party) である。この二つの新党をも含めた野党は、こぞって、Alliance のマレーシア連邦結成の方法に反対していた。そこで、SF, PPP, PMIP, UDP を中心に、Abdul Aziz をリーダーとして、1964年の総選挙に備えて、野党連携が試みられた。だが、インドネシアの「対決」が武力に訴えるほど硬化してくると、野党連携は、二重の意味において、プロ・インドネシア的行動と解され易かった。マレー人系の野党にとっては、マレーシアへの忠誠心を疑われる元となり、中国人系の野党にとっては、インドネシアの中国人追放政策の故に、反中国人的行動と解される元となった。この点、中国人は、anti-Malaysia である以上に anti-Indonesia であった。

その結果、まず UDP と PPP が野党連合から離脱した。さらに、マフィリンド構想(1963)は、華僑抑圧策と考えられ、野党の足並みはすっかり乱れた。PMIP の Burhanuddin 党首、Dato Raja Abu bin Hanafia 副党首はプロ・インドネシアの疑いで逮捕され、SF の左派リーダーは、国内治安維持を理由に逮捕された。NCP は SF に合流した。Malayan Party のリーダー Tan Kee Gak や UDP の有力党員の若干は、MCA に加入した。インドネシアの「対決」は、野党の多くの中国人を反政府から親政府へ転向させ、1959年の総選挙時に弱体化した MCA に再び活力を与える要因となった。

しかし、この MCA に、さらに大きな脅威となる力が、シンガポールで成長しつつあった。それが PAP である。シンガポールを含めたマレーシア連邦の結成は、中国人口の国内の比率を高めるとはいえ、それは決して MCA の立場を良くするものではなかった。

もともと、シンガポールとマラヤの併合に

は、シンガポールの中国人の共産化防止という狙いもある。PAP 党首の Lee Kwan Yew シンガポール首相は、PAP の極左グループに痛めつけられていた。この極左グループは1961年に、Balisan Sosialis (Socialist Front) を結成して PAP から分離している。マラヤ、シンガポールの併合は、そうした極左グループをマイノリティに押し込むのに都合がよかった。しかし、併合によって中国人人口が増加すれば、マレー人がマイノリティになるという民族間の力関係の問題もあったから、サバ、サラワクの連邦加入が同時に必須となったのである。ブルーネイは、石油の利権もあり、ブルーネイ王家は古い格式を誇って、マラヤの諸王家と同格に取り扱われることを好まなかったので、連邦には参加しなかった。1963年9月16日にマレーシア連邦は発足した。

その直後、9月21日に、シンガポール州選挙が全マレーシアの注目のうちに行なわれた。その結果は、MCA の期待を裏切るものであった。社会主義福祉国家を目指し、民族間の平等権を主張する PAP が快勝したのである。勢いづいた PAP 党首 Lee Kwan Yew は、豪語した。「将来 UMNO は、MCA に代わる PAP と連携しなければならないであろう」と。そして、1964年のマラヤでの総選挙直前に、1969年における勝利を期して、候補者を立てることになった。

1964年4月の総選挙では¹⁰⁾、104議席中89議席を確保して、Alliance は圧倒的な勝利を得た。PAP は準備不足もあり、マラヤに組織もなかったので、マラヤでは1議席しか獲得できなかった。しかし、Lee Kwan Yew の弁舌のさわやかさも手伝って、PAP のマラヤ進出は、中国人の政治への関心を感情的に高めたことは否定できない。1964年7月に、シンガポールとペナン州の Bukit Mertajam

で些細なことから相次いで発生した中国人とマレー人の衝突が、その傾向を示唆している。

PAP のマラヤにおける政治活動は、MCA のみならず、UMNO にとっても一つの脅威であった。Abdul Rahman 首相は、UMNO は MCA を裏切らないと約束した。Alliance は漸進的に民族間の平等の実現を目指してはいるものの、UMNO と MCA の妥協の原則が、そのままの形で留まっている以上は、現実主義的 UMNO と理想主義的 PAP の連携は考えられないであろう。事実、PAP の活動が強まるにつれて、民族間の緊張も高まり、1965年8月に、シンガポールは、マレーシア連邦から離脱させられている。

シンガポールの連邦離脱によって、民族間の緊張は緩和され、またそのような緊張をひき起こす分子と見られる者には、強い措置がとられた。1966年以降には、スカルノ大統領の失脚も目立ちはじめ、インドネシアの対決政策は弱化していった。シンガポールの連邦離脱に伴い、サバ、サラワクでも若干の問題はあったが、Abdul Rahman 首相の硬軟両様の巧みな措置で、連邦崩壊の危機は切り抜けた。フィリピンのサバ領有問題は、まだ完全には解決されていないが、東南アジアの地域的共同の雰囲気は種々様々な意味をこめて高まっている上、サバ住民自体が、フィリピンより経済のはるかに安定しているマレーシアへの帰属を望んでいるから、いちおうこの段階で、マレーシア連邦結成への外部からの危機は去ったといっておくであろう。

マレーシアは、その後、経済成長に全力を注ぐようになった。1967年9月には、東南アジア初の製鉄会社マラヤワタがバタワースに設立された。農地の開発、稲の二期作化、農業の多元化、マレー系農民や中小企業に対する補助対策が次々に打ち出された。合併会社の設立、外資導入は積極的に歓迎された。マレー語国語化法案も1967年に国民議会を通過し、

10) シンガポール、サバ、サラワクでは、間接選挙が行なわれた。

学校教育の体制も、Alliance の政策通り整ってきた。しかし、こうした Alliance 政府の実績は、後述するように必ずしも民族間の緊張を弱めるのに役立っているとは考えられない点もある。

1964年以後の野党の動きで目立つのは、民政運動党 GRM (Gerakan Ra'ayat Malaysia) の結成である。GRM 結成の母体となったのは、UDP である。UDP は1962年以来、民族共同体の枠を越えた政党に脱皮しようとしたが、その努力は、あまり成功しなかった。1967年に、SF の穏健左派、マレー系知識人を吸収して、UDP は解体し、GRM が誕生した。党委員長は、シンガポール大学マレー学の教授 Syed Hussein bin Al-atas, 副委員長は Lim Chong Eu, 書記長は元 SF 党員の Tan Chee Khoo である。この役員構成から見ても判るように、GRM は、いちおう社会主義福祉国家を目指すものの、マレー人優先政策は原則的に認める健全野党の立場をとり、Alliance と PAP の中間的存在である。

PAP は、シンガポールのマレーシア連邦離脱後、民主行動党 DAP (Democratic Action

Party) と名を替えて、あまり目立った動きを取らなかった。最も大きな野党の変化は、SF に見られる。SF は、インドネシアの対決政策の硬化と共に、多くのリーダーを逮捕されて、実質的にマレー系の人民党 PR と中国人系労工党 LP とに分解してしまった。また、LP は、穏健左派の有力者を GRM に取られた上に、後述するように、1967年末のペナン暴動の際や、1968年末に多くの党員が、不穏分子として逮捕されて、1969年の選挙に候補者を立てることができなくなった。

III 1969年の総選挙結果

マレーシア連邦の総選挙（1969）は、まだ終わったわけではない。サバとサラワク両州では、交通の便が悪く、川に沿ってモーターボートで投票箱を持ち回らねばならないので、投票の完了するのは、サバでは5月25日、サラワクでは6月7日の予定であった。Melaka Selatan の投票日は、5月31日に延期されていた。これらの投票は、いずれもクアラルンプール暴動のために無期延期となった。

しかし、マラヤにおける選挙結果の大勢は

表 4 州議会における州別与野党別議席数

年 度	1959		1964		1969	
	与	野	与	野	与	野
州 名						
Perlis	12		11	PMIP 1	11	PMIP 1
Kedah	24		24		14	PMIP 8, GRM 2
Kelantan	2	PMIP 28	9	PMIP 21	11	PMIP 19
Terengganu	7	PMIP 13, PN 4	21	PMIP 3	13	PMIP 11
Penang	17	SF 7	18	UDP 4, SF 3	4	GRM 16, DAP 3, PR 1
Perak	31	PPP 8, PMIP 1	35	PPP 5	19	PPP 12, DAP 6, GR 2, PMIP 1
Pahang	23	SF 7	24		20	PR 2, GRM 1, IND 1
Selangor	23	SF 3, IND 1	24	SF 4	14	DAP 9, GRM 4, IND 1
Negri Sembilan	20	SF 3	24		16	DAP 8
Melaka	20		18	SF 2	15	DAP 4, GRM 1
Johor	28	SF 3, IND 1	35		29	IND 2, DAP 1

[注] 1959, 1964年度の数值は K. J. Ratnam & R. S. Milne, *The Malayan Parliamentary Election of 1964, 1967*; 1969年度の数值は, The Straits Times (1969年5月12日) より。

表 5 1964, 1969年度総選挙における州・政党別得票率(国民議会)

州名	政党	Alliance		PMIP		PPP		(PAP) DAP		(UDP) GRM		(SF) PR		IND		others	
		1964	1969	1964	1969	1964	1969	1964	1969	1964	1969	1964	1969	1964	1969	1964	1969
Perlis		63.3	54.8	36.8	45.2												
Kedah		68.6	53.4	25.1	41.1					1.6	5.5	4.8					
Kelantan		42.9	47.5	56.9	52.4							2.1	0.1				
Terengganu		56.7	50.0	32.1	50.0							0.5	PN 0.7				
Penang		47.8	36.9	2.7	7.0		0.4	0.3	11.1	18.1	44.6	31.6					
Perak		55.6	43.1	10.5	17.9	16.6	18.8		16.1	6.5	3.7	8.1	2.7	0.4			
Pahang		71.1	60.8	10.8	24.4				14.8			18.2					
Selangor		53.9	44.0	2.4	7.2	0.8		11.1	31.4		17.4	31.8					
Negri Sembilan		59.1	46.2	0	14.7	1.1		4.6	36.2	9.8		22.0	2.2			UMCO 1.9	
Melaka		66.2	45.2	3.7	18.4			3.3	22.8			26.8	13.6				
Johor		71.7	67.7	1.4	4.0			1.0	21.5	3.7	4.2	22.2		2.6			

[注] 1964年度の数字は、K. J. Ratnan & R. S. Milne, *The Malayan Parliamentary Election of 1964*, 1967 より算出。1969年度の数字は、The Straits Times (1969年5月12日) より算出。

もう定まっている。その特徴は簡単に次のようにまとめられよう。

(1) Alliance の国民議会の議席数は、23も減り、州議会では、計73議席も減って、その勢力は大幅に後退した。(2) PMIP の得票数は全国的に増加した。(3) 諸民族の権利の平等化を主張する DAP と PPP が都市部で予想外の伸びを示した。(4) GRM が特にペナン州で快勝した。(5) SF がほとんど全面的に姿を消した。

上記の諸点について、さらに細かく検討してみよう。国民議会の議席数では、Alliance は中国人やインド人の多い都市部で惨敗している。これは、Alliance 中の MCA の惨敗を意味する。MCA の国民議会の議席数は、前回の27議席から13議席に減った。ペラ州では、MCA の2人の有力者が落選した。Lim Swee Aun 前商工大臣は、元 Serdang 農業専門学校講師で、現在農業に従事している GRM の候補者 Ng Hoe Hun に4,868票差で破れている。Ng Kam Poh 前社会福祉大臣は、バス会社の職員で、DAP の候補 Chan Fu King に3,774票差で破れている。

しかし、Alliance の後退が、MCA の敗退によるとのみ言えないところに、今回の選挙結果の一つの大きな特徴がある。得票数や州議会での議席数の点からすれば、Alliance は全国的にマレー人の票をも失っている。投票

人口が、前回の200万人から330万人に増加しているにもかかわらず、Alliance の得票総数は、前回より20万票も減っている。

UMNO は PMIP の牙城であるクランタン州を切り崩すため、選挙運動期間中、Abdul Rahman 首相をはじめに主要閣僚を送り込んで、壮烈な選挙運動を展開した。そうしてもなお、Alliance は PMIP が Abdul Rahman 首相のおひざ元のケダー州を切り崩したほどの成果を挙げることはできなかった。ケダー州のみならず、主要閣僚と対立候補との得票差は下表のように前回より大幅に減少している。Senu bin Abdul Rahman 前情報・放送相は、ケダー州にて、PMIP の対立候補に88票差で破れ、UMNO の中堅リーダーとして将来を嘱望されていた Mahathir bin Mohamed は、同様にケダー州にて、PMIP の対立候補に989票差で落選している。

Alliance が国民議会の議席数を前回同様に確保した州は、プルリス、パハン、ジョホールの3州であるが、この3州でも、Alliance の得票率は、プルリス63.2%→54.8%、パハン71.1%→60.8%、ジョホール71.7%→67.6%にそれぞれ減少している。

Alliance が、過去14年来マレー民族の生活水準向上のために、貢献してきたことは、誰も否定できないであろう。それにもかかわらず、マレー人の票をも、Alliance がかなり

	1964年度	1969年度	出身地
Abdul Rahman 首相	11,000 ^票	3,500 ^票	ケダー州
Abdul Razak bin Dato Hussein 副首相	10,142	8,925	パハン州
Tan Siew Sin 前蔵相	13,327	7,300	マラカ州
V. T. Sambanthan 逋信相	5,933	44	ペラ州
Mohamed Khir bin Johari 前教育相	10,680	2,275	ケダー州
Sardon bin Hj Jubir 前運輸相	13,727	9,486	ジョホール州
Khaw Kai Bow 前自治・住宅相	5,213	1,523	スランゴル州
V. Manickavasagam 労働相	6,099	485	スランゴル州

失った点に、今回の総選挙結果の最も大きな問題点があるように思われる。クアラルンプール暴動は、人種対立という形で論議され、また、この暴動の故に、Alliance 勢力のマレー人地域での後退という事実は、軽視されがちであるが、おそらく Alliance にとって最大の衝撃は、UMNO の地盤として安心していた地域が、PMIP によって切り崩された事にあったように思われる。つまり、Alliance の後退を、MCA の惨敗という形でのみ理解すれば、マレーシアが国内的に直面している状況は、正しく理解できないように思われる。この点については、さらに後述する。

野党のうちで、特に目立つのは、PMIP の得票の伸び様である。PMIP が確保した国民議会の議席数は、DAP より 1 議席 少ない。しかし、得票数全体や州議会選挙で獲得した議席数からすれば、PMIP は、DAP より優位にある。その点、PMIP の今回の伸びの特徴は、それが全国的な現象であったことにある。PMIP は、マラヤの北東部においてのみ強いと従来いわれていた。今回の選挙では、PMIP は全国的に候補者を立てて選挙運動を展開した。まだ十分に全国政党としての組織も整っていない上に、UMNO と比べれば、人材や選挙資金もさほど豊かであるとは思えない。とすれば、こうした PMIP の戦略は、力を分散させ、ある程度の UMNO の地盤は切り崩せても、PMIP 自身の地盤を守る余力を持たず、惨敗するのではないかというのが投票前の一般の予想であった。この予想を見事に破って、PMIP は、かつての地盤をも取り戻し、北西部に橋頭堡を作り、全国的に票を獲得したのである。

マラヤの政治についての文献を読めば、誰もが共通に思うことは、PMIP は、イスラム教を中心にした極端に排外的なマレー人の民族主義政党であるということである。選挙運動がはじまる前まで、PMIP について、そう

したイメージを持っている何人かの中国人に私は出会った。しかし、選挙運動中、PMIP のリーダーの言辞に、私はそうした他民族を強く排撃する言葉を見出さなかったどころか、PMIP のリーダーは、選挙区に PMIP の候補者のいない地域では、GRM に投票するようマレー人に呼びかけ、党员には GRM の候補者に協力するよう指示さえ出していた。PMIP の強い民族主義的性格が簡単に変化するとは思えないが、この PMIP の変化は、見逃せない。つまり、こうした PMIP の姿勢は、中国人の中に、PMIP に好意を寄せる者を作ったことは事実である。ある中国人は、PMIP のこの変化は、PMIP の立候補者に、若い大学卒の知識人が増加したことによると説明したが、これは当たっているかもしれない。

しかし、PMIP の強力な支持層は、何といっても、マレー農民である。中でも、中堅自作農民とイスラム学校の教員や学生である。しかし、これだけならば、PMIP の支持票はあまり伸びなかったであろう。PMIP の伸びは、急激にふくらみつつあるマレー人の新中間層の支持に依存しているように思える。

他の野党のうちで、PPP の勝利も予想外のものであった。PPP は、インド系の Seenivasagam 兄弟の個人的な魅力によって支えられているペラ政党であるといわれていた。今回の総選挙前 3 月には、党首の D. R. Seenivasagam が死亡し、兄の S. P. Seenivasagam が党首になったものの、PPP は、大幅に力を失うであろうと言われていた。PPP は、ペラでは、国民議会には 5 名（インド系 3、中国系 2）、州会には 13 名（中国系 7、インド系 4、マレー系 2）の候補者を立て、州会では 11 名当選すればよいと党首は語っていた。ところが、州会では 12 名（マレー系 1 名落選）が当選し、国民議会では、4 名（インド系 1 名落選）が当選したのである。PPP は、ペラ州では、安定した実力を示した。しかし、

依然として、ペラ 1 州にのみ地盤を持つ政党である。

シンガポールの PAP の友党 DAP は、国民議会での議席が 1 から 13（10 人は中国人）に飛躍的に伸びている。この政党が中国人の支持を得てかなり伸びることは、選挙前から誰もが予想していた。しかし、DAP の選挙運動は、あまり目立ったものではなく、新聞でも、派手に報道されなかった。ペナンとペラ州とを除き、特に MCA の敗退した都市部で票を得ている。

GRM は、国民議会に 14 名、州会に 37 名の候補者を立て、前者では 8 名、後者では 26 名の当選者を出している。特にペナンの州会では、24 議席中 16 議席を確保して、州行政を担当することになった。GRM がペナン州で快勝したのは、おそらくこの政党の穏健な性格と、後述のようなペナンの土地柄によるところが大きいように思われる。スランゴール州でも、かなりの票を確保しているが、対立候補が Alliance の候補者であるから、与党への不満票を全部吸収したと見てもよいであろう。

最後に触れておかねばならないことは、社会主義前線 SF についてである。すでに述べたように、SF は、1964 年の選挙の際、硬化したインドネシアの対決のため、党は分裂して、穏健左派は脱党している。また、極左・プロインドネシアのリーダーたちは、不穏分子としてかなり逮捕されたらしい。その結果、SF は、実質的にマレー系の人民党 PR と中国人系の劳工党 LP に分裂してしまった。

今回の総選挙で PR は州会には、主に南部のパハンとマラカ、北部では、プルリスのマレー人の票を獲得すべく努力したものの、さほどの成果を挙げていない。それは、一つには、PR の候補者が主に都市生活者であり、若いということもあって、マレー人の村落生活者に訴える力を持たない点にある。しかも、

表 6 人民党 PR の州議会選挙結果

州 名	立候補者数	選当者数	得票数
ジョホール	3		1,492
マラヤ	15		16,498
スグリ スンピラン	1		586
パハン	11	2	10,478
ペナン	1	1	2,390
プルリス	5		1,118

社会主義そのものが、まだ一般にイスラム教に反するものと受けとられている。したがって、学校教員の支持は多少あっても、それは、まだまだマレー人全般の共感と支持を受けるものではない。州議会選挙結果を見てもわずかの支持しか得ていない。

劳工党 LP は、今回の総選挙には候補者を立てず、ボイコット運動を展開している。ことの起こりは、昨年 11 月 9 日に、「好戦的共産黨員」と呼ばれる者 116 名の逮捕にある。どこで誰が逮捕されたかは発表されなかったが、逮捕者の数は、11 月 11 日には、140 名以上に達し、さらに 60 名が捜し求められていると Abdul Razak 副首相は公表した。この逮捕者の中に、多くの劳工黨員が含まれていたようである。

政府の白書によれば、現在のマレーシアには、武力革命を目指す共産党のテロリスト団が、タイとマレーシアの国境に潜んでいて、彼らは劳工党 LP と人民党 PR に侵入しつつある。1966 年 10 月から、LP と PR の両党によって、250 もの非合法デモが行なわれた。1967 年末のペナン暴動も、LP の扇動によるものである。こうした好戦的共産黨員の活動は、民族間の緊張を高め、イスラム教に反し、国内治安を脅かすものである、と政府の白書は逮捕の理由を説明している。(The Sunday Times, 1968 年 11 月 10 日)

この大量逮捕に抗議して、勞工党の2人の国民議会の議員が辞任し、逮捕された者の釈放と国内治安維持法の廃止を訴えるため、勞工党は、選挙ボイコットを国民に呼びかけることになった。

勞工党の選挙ボイコット運動は、主に都市部で、ポスターやパンフレットで行なわれ、若干のトラブルを起こし、さらに逮捕されたものもいるが、このボイコット運動の起こしたトラブルの中で、目立ったものの一つは、4月25日の選挙運動期間中、UMNOの地元の広報委員（マレー人）1名が、勞工党员と思われる者によって殺された事件である。このため、ペナンでは、3日間ばかり、1967年末の暴動の中心地でもあった Jelotong 地区（不良、賭博師の多い地区で、よく喧嘩があると地元民はいう）で、1日20時間の外出禁止令が出た。

政治が民族問題とからんでいる時には、騒動の波及は、さまざまな噂の流布、扇動と偶発的な事故によって急速に拡大する。1967年末のペナン暴動の折には、ケダー州のアロールスター北西部にも外出禁止令が出たが、それは、ペナンのマレー人が、ペナンで多くのマレー人が殺害されているのに、ケダーではおとなしくしているのかと、扇動に来たことによるのだそうである。4月のペナン騒動の時にも、翌日、中国人同志の子供の喧嘩があった。それは、さっそく噂になって、マレー人が中国人の子供に報復的に暴行を加えたと伝えられて広まった。しかし、4月の殺害事件は、警察の機敏な措置と地元民の協力で、事件は拡大されずにすんだ。

しかし、選挙ボイコット運動のからむトラブルで、選挙後のクアラルンプール暴動と一脈のつながりが十分あると考えられるものは、クアラルンプール郊外で起こった一事件である。クアラルンプールから8マイル北の Kepong で、5月4日、警官が一勞工党员（中

国人）を射殺した事件である。選挙運動期間中、警官は休暇も取り消されて、パトロールを行っていた。Kepong で、午前4時30分頃、8～10名の青年たちが、選挙ボイコット・スローガンを、主要道路の交差点の路上に、ペンキで塗っていた。パトロール警官は、それを注意したところ、青年たちは、警官に鉄棒を持って立ち向かって来た。警官は市場小屋のかげに逃れて警告したが、なおパチンコ（catapult）で襲ってきたので、警官は威嚇の発砲をした。それで1人の青年が傷つき、その青年は2時間後、病院で死亡した。青年は23才の中国人で、勞工党员であると新聞は報じた。（The Straits Times, 1969年5月5日）

投票日の前日、この青年の葬送デモが行なわれた。クアラルンプールの Jalan Sultan から Kepong の埋葬地 までの12マイルの道を数千人の一団が、青年の棺を中心に葬送行進を行なった。その棺は赤い勞工党旗で覆われ、32名の婦人が棒の組合せ様のもので棺をかつぎ、200人の青年が棺側に付き添った。中国式葬儀に用いられる鐘、太鼓をならし、「勞工党万歳」を叫びながら、Jalan Sultan から Jalan Petaling, Jalan Yap Ah Loy, Jalan Klyne, Jalan Mountbatten, Jalan Tuanku Abdul Rahman を経て Kepong に向かった。事故はなかった。しかし、投票日の前日に、クアラルンプールの繁華街には、このような異常な雰囲気ですでにあったのである。

IV 選挙結果の意味するものと 首都暴動

今回の総選挙で、おそらく与党にとって最も大きな衝撃は、MCA の惨敗ではなく、PMIP の伸びにあったように思われる。

MCA は、その創設当初から、指導層と下部会員の間で、組織内統一という問題を抱えていた。初代会長や現会長の Tan 父子は、

古い移民の家柄で、中国語より英語に堪能な人たちである。後から移民して来て、中国文化に強い郷愁を感じている中国人とは肌が合わないし、MCAの主張は、中国人の中・低階層には、やや冷淡である。一般の中国人はマレー人より経済的に優位にあると必ずしも言えない段階に来つつある。したがって、MCAの主張に不満を持つ中国人の支持する野党の伸びは、常にMCAの後退を意味していた。

ところが、連盟党のUMNOは、第2次世界大戦以来、マレー人の利益擁護のための代弁者としての地位を確保し、マレー人優先政策を着実に実行してきたのである。そして、従来ほとんどのマレー人は、UMNOの「立場」に異論を唱えるものではないというのが一般の見方であった。この点、UMNOは、MCAのような組織内統一の大きな悩みは持っていないし、マレー系の手ごわい野党はなかった。しかし、今回の総選挙は、UMNOの立場に不満を持つ者が、マレー人の間にも少なくないことを明らかにしている。国民議会での連盟党の得票率は、前回の58.5%から48.5%に下落しているが、PMIPは14.6%から23.7%に上昇している。連盟党のUMNOの得票率のみと比較すれば、UMNOとPMIPの比率の差はもっと縮むであろう。この点は、UMNOの今後の政治姿勢を理解する上に、かなり重要な意味を持っている。言い換えると、UMNOは今後、マレー人の支持を回復するように努力するであろうが、この努力の方向によっては、UMNOの非マレー人対策は、さらに高姿勢になる可能性がある。そこで、どういう不満を持つものがPMIP支持にまわったかを検討すれば、UMNOが今後直面する問題も明らかになるだろう。

最初にUMNOとPMIPの性格の相違を指摘しておこう。PMIPは、イスラム教を中心にした熱狂的なマレー民族主義政党であると喧伝されている。そうした傾向があったこ

とは事実であろう。しかし、今回の選挙戦を通じて見た場合、マレー民族主義という点では、両者に本質的な違いはないように思える。

UMNOは他民族に対し寛容で、PMIPは非寛容であるといわれるが、UMNOの政策は決して、中国人やインド人に寛容な政策とは考えられないし、また選挙運動中のUMNOの要人達のPMIP批判が正しいものであるとするならば、PMIPはGRMやDAPと密接に連携したことになる。

イスラム教については、PMIPは間違った解釈をし、保守的であるといわれるが、マレー農民のイスラム教の解釈が保守的であるのは、村落に見られるsyncretismのせいであり、PMIPのせいではないであろう。UMNOとPMIP共にイスラム教を尊重することには変わりはない。スルタン制に対しても本質的な意見の差があるとは、現段階では考えられない。

また、UMNOは、親英一辺倒の政党と解している人も少なくない。しかし、これは、表面的な見方であり、マラヤ連邦独立交渉以来のUMNOの立場は、決して親英一辺倒とは言えない。UMNOの党の基盤には、根強い民族主義思想があって、共産ゲリラの鎮圧とインドネシアの対決のために、あれほど犠牲を払った英国に対して、1966年頃からUMNO要人の態度は冷淡である。¹¹⁾特にUMNOの民族主義と真っ向から対立するシンガポールのLee Kwan Yew首相の考え方、即ち、民族の平等観に基づくマレーシアの建設という考え方に対する英国の好意的態度は、UMNO要人にとって鼻持ちならないのである。

民族主義という観点からは、UMNOとPMIPには、本質的な違いは見出されない。両者の最も大きなニュアンスの違いは、

11) この点については、R. Allen, *Malaysia, Prospect and Retrospect*, 1968. に詳しい記述がある。

UMNO が資本主義的であるのに対し、PMIP には、社会主義を容認する傾向がある点にある。この点は、PMIP の現党首 Mohamed Asri クランタン州首相の言葉からも判る。かつてのマレー民族主義政党 MNP の PMIP への影響は、この点にも見られる。

こうした UMNO と PMIP の違いは、両者のマレー人対策の在り方についての意見にも見られる。たとえば、UMNO は、マレー人のために、今まで、M\$ 430,000 を費やして、4,000 ものモスクとスラウ（小礼拝堂）を政府の手で建ててきたと誇る。しかし、村人は、そうしたモスクは選挙用であるといって、いっこうに感激している様子がない。これに対し、PMIP は、モスクは、村人が自らの力で建てるべきもので、政府のやり方は正道ではないと批判する。

それに、UMNO の候補者の大部分は、知的水準、生活環境、経済水準において、一般マレー人とは、およそ次元の異なるメトロポリタンである。村人とひざ突き合わせて語り合う議員ではない。モスクや学校の落成式に、随員を連れて大型車に乗ってやって来る UMNO のエリートに対して、一般のマレー人は距離を感じても、親近感や信頼感を持ちそうにない。

この点で注意を向ける必要があるのは、マレー人の社会観である。日本などと比べれば、マレー人の間では、分際の観念が非常に弱い。マレーシアは、土農工商の身分意識を確立した封建時代を経ていないし、だいたいにおいて家柄や家格の観念が非常に弱い。したがって、相互の間の嫉妬や競争心は非常に強い。こうしたマレー人には、Abdul Rahman 首相のような王族出身の政治家は別であるが、他のエリートは高慢に見えるのである。

農村開発のためにできた道路上を大型車で走る政府要人や高官と接する機会が増加するにつれて、一般マレー人は、彼らの間に大き

な格差を感じ、日がたつにつれて、焦燥感と挫折感を深くする。だから、UMNO のやり方は、資本主義的であり、経済力のある中国人と共に利益をむさぼる方法であるといわれると、一般のマレー人は、実感としてその説に共鳴し易い。

マレー人の生活向上のために果たした UMNO の役割は、高く評価されるべきものである。まだまだマレー人には貧しい農民はいる。しかし、多くの農民は、UMNO の政策によって、実際に多くの利益を得、かなりのマレー人は、官吏、教員、警官、軍人となって、社会経済的地位は高まったのである。それにもかかわらず、こうしたマレー人の票を UMNO が失った事を説明する要因は、上記の格差以外にない。

事実、村落における強硬な PMIP 支持者は、自作中堅農家である。しかも、今回、PMIP の多くの支持票は、マレー人の下級官吏や教員からまわっている。これらの層は、UMNO の政策から、最も多くの利益を受けつつある層である。しかも、彼らの得る利益は、決して小さなものではない。

たとえば、ケダー州の農務部の官吏の初任給は、表 7 の通りである。Division I は大学卒、Division II は農業専門学校卒（20～22 才）、Division III は中学校卒の初任給である。Division III は、6～12カ月の見習い期間の給与である。この期間が済めば、もっとよくなる（M\$ 120～130 ぐらい）。生活手当の額は、結婚すればもっとよくなる。Division II の給料は、日本円に換算すれば、6 万円以上である。しかも、米価が日本の 3 分の 1 であることを思えば、この給与が形質とも悪くないものであることは明瞭である。

だが、その格差が目立つ。しかもこの格差は、停年まで続く。分際の観念の比較的弱いマレー人的思考様式からすれば、こうした格差は、心理的に耐え難いものである。あるマ

表 7 Kedah 州 農 務 部 官 吏 の 初 任 給 （1969年）

	Initial Salary (Basic)	Cost of Living Allowance	Housing Allowance (Alor Star)	Total
Division I	M\$ 554	90.00	90.00	734.00
Division II	M\$ 380	75.00	52.50	507.50
Division III	M\$ 109	13.10	24.00	146.10

レー人青年は、独立後、政府は植民地時代の横割りの格差を、そのまま残していると憤懣をぶちまけていた。給与格差のあまりない現在の日本から見れば、この青年の憤懣は無理もないように思える。

かつての日本にも、こうした格差の強い時代はあった。しかし、同時に日本には、根強い分相応の観念もあった。マレー人の場合には、それが非常に弱い。だから、一般のマレー人のそうした不満が PMIP の大量得票となって表現されたとしても不思議ではない。ただ、マレー人である以上、UMNO のマレー人優先政策に異論を唱える者は少ない。UMNO に不満はもっていても、対異民族の態度の問題になれば、UMNO に同調する者も少なくないであろう。この点に、UMNO に不満を持つマレー人の性格が見られ、UMNO の政治に対する姿勢が、今後どうなるかという分岐点が見出される。

DAP と PPP の票の伸びも、上に指摘した格差について不満を持つ者の支持によるとも言える。しかし、DAP と PPP の支持者は、中国人かインド系住民がその大部分を占める。彼らの政府批判には、もっと基本的な問題が横たわっている。

マラヤ連邦が独立して今年12年目である。この間、政府要人は、マレー人以外の諸民族に、マラヤ（1963年からはマレーシア）に対する忠誠心を強調してきた。マラヤで生まれ、

マラヤで育ってきた若い中国系やインド・パキスタン系住民は、マレーシアを祖国と思うようになってきている。マレーシア複合民族国家建設は成功しつつあるように見える。だが、一国としての国民意識の高揚は、同時に、国民としての平等の権利意識をも高めることになるのは、自然の成り行きであろう。DAP や PPP の伸びは、こうした国民の要求の強さを反映している。だが、この要求にどう答えるかは、現在のマレーシア政府にとって、上述のマレー人の不満層にどう対処するかという問題とからんで、難しい問題である。

この点、GRM の得票の伸びは、DAP と PPP と同じレベルに置いて語ることはできないであろう。GRM は、社会主義を目指してはいるものの、いちおうマレー人優先の政策を是認している。しかも、GRM が特に伸びたのは、ペナン島である。ペナン島は、かつて自由港として栄え、また今後も観光地として発展する以外に町を伸ばす方法のない中・小実業家の多いところである。対岸の Butterworth には、マラヤワタ製鉄所もあり、この地は、将来工業地域として発展する可能性もある。しかし、現在のところでは、ペナン州では、ペナン島の商業活動に従事している者が、職業別人口からすれば、はるかに多いであろう。そうした土地柄の故に、過激な行動は敬遠される。首都暴動による外出禁止令のために、被害を受ける者は少なくない。

経済事情が悪化しない限り、ペナンでは、GRM のような比較的穏健な政党が歓迎される。

以上が、マレーシアの今回の総選挙結果の分析である。今回の選挙結果は、マレーシアの国家建設の成功は、DAP や PPP の伸びに見られるように、中国系、インド・パキスタン系住民の国民としての平等の権利の要求の高揚に結びついていることを示している。他方、マレー人の間でも、経済的格差に強い不満があることが示された。この不満を持つ層は、いまだ中国人を scape goat としたて易い。経済的格差を本質的に解消することが困難であれば、マレー民族の利益擁護の代弁者と自ら認める UMNO のマレー人優先政策は、マレー人の不満層を吸収するために、硬化する可能性はある。MCA の惨敗と首都暴動は、UMNO が政治権力をいっそう強く握る機会を提供している。暫定内閣の要職は UMNO の手中にある。力による治安の回復は、急速に平常の状態を取り戻すための有効な一つの方法であるかもしれない。軍や警察は補強さ

れつつある。しかし、マレーシアのような複合民族社会で、それが国民の信頼感を回復させる方法であるかどうかは疑問に思われる。野党のリーダーたちの協力の申し出は、今のところ拒否されている。中国人の不安感はまだ高まりつつある。極端な反政府的行動に身を投ずる中国人も出て来る可能性もあろう。ベトナムでの米軍の撤退は、ジャングルに潜む共産党員を元気づけることにもなろう。外出禁止令は、なかなか解けそうにない。首都暴動は、いろいろな意味で、マレーシアの今後の国内問題の難しさを予告しているように思われる。

【付記】 ペナン州では、GRM 政権が非常事態下に発足し、Lim Chong Eu 氏が首相となった。ペラ州では、GRM が中立を宣言したため、野党の連立政府はできず、Alliance 州政府が樹立された。東マレーシアの選挙については、マレー人以外の原住民族もからんで、民族間の利害対立も複雑であるから、事態がよほど回復しなければ、選挙を行なうことは困難のように思われる。

(1969年6月3日、アロールスターにて)

インドネシア

国立生物学研究所だより

山 田 勇*

インドネシアの首都ジャカルタから車で南へ約60分、左手前方にゲデーパンゲランゴ山塊、右手にサラック山（2211 m）の秀麗な姿がみえる所にボゴールの町があります。

この町に下宿してすでに半年近く、いつでもほとんどは調査旅行にでている関係上ここに腰を落ち着けているとはいえませんが、それでも旅から帰ってくるとなんとなくほっとするのはすでになかなれたからでしょう。私の下宿は、ジュンバタンメラとよぶボゴール最大のショッピングセンターよりベチャで約10分の所にあり、まわりは同じ型のもと官舎がならび、前庭にうえられたアガチスの大木を通してサラック山が目の前にみえます。

すでに60才をこえた老夫婦が管理しているこの下宿には私以外にインドネシア人の学生3人、病院につとめる女性1人、老夫婦の甥が1人同宿しています。私の部屋は10畳くらいの広さで窓がないため少々暑いのが欠点ですが、たえず持ち込むサンプルの置場が広いので便利です。家賃はひと月3食つきで8,000ルピア、調査にでて1月食事をしない場合は5,000ルピアの契約ですが、調査にい

っても結局全額支払うことになります。インドネシア人学生の通称相場が5,000ルピアといますからそんなに高くありません。むろん、ジャカルタやボゴールで日本人の住んでいる家からくらべるとはるかに見劣りはしますし、食事もそういいとはいえませんが、何をしても気楽であることがいいのです。それに、たえず部屋へやってくる同宿人としゃべるのは楽しいことです。機動性を考え、単車を1台買って、ボゴールにいる時は毎日この下宿から研究所へ通っています。ボゴールの町の中心には植物園があり、隣接してボゴール宮殿、そしてそのまわりに主に生物学系統の大学、研究所がちらばっています。学術都市といわれるだけあってこういった研究所の数は多く、主なもので33、教育施設などを含めると50近い数になります。その中でも伝統的にこの中心をなしているのが現在、国立生物学研究所とよばれる植物園を中心にした研究組織なのです。

ボゴール国立生物学研究所

ボゴールといえば Kebun Raya というくらい、この植物園は有名です。ジャカルタから近いことと、ここ以外にあまり見る所がないこともあって、たえず客があります。平日は外国人および特別許可をもった者以外入場できず、一般に公開されるのは日曜日だけです。この理由は日曜日の雑踏をみるまではわかりませんでした。もし毎日開放したら1週間でこの美しい植物園も荒廃に帰するであろうと思われるくらい、日曜日の群衆はものすごく、よく木に登り、花をとり実を投げ枝を折っています。平日にくる外人客はたいていジャカルタから車できて、さっとひとまわりするだけで、園内を散策する人などほとんどありません。植物園を車でみてまわるという愚劣な行為に加えて、そういう人間に限ってこの植物園はあまりよくないなどといま

* 京都大学大学院農学研究科（森林生態学）



写真 1 ボゴール植物園

すから、私は近頃ますます車族嫌いになっています。16,000点もの植物を擁するこの植物園のよさは1度や2度きてわかるものではないでしょう。150年の伝統と数多い研究者によってつちかわれてきたこの広大な200エーカーの園内のうっそうたる景観は長くいればいるだけ味わい深いものになります。

私の所属するのは、Lembaga Biologi Nasional (LBN) とよばれる国立生物学研究所で、これは大統領直属で内閣と同列の Lembaga Ilmu Pengetahuan Indonesia (LIPI, Indonesian Institute of Sciences) に属します。LIPI に所属する研究所はこのLBNと自然科学関係二つ、科学技術関係六つ、社会科学関係二つの合計11の研究所があり、主にジャカルタ、ボゴール、バンドンにちらばっています。

LBNの下に現在五つの付属研究機関があります。すなわち、Lembaga Penelitian Botani (Institute for Botanical Research), Herbarium Bogoriense, Meseum Zoologicum Bogoriense, Lembaga Penelitian Lant (Institute for Research on Marine Biology),

Kebun Raya で、このうちジャカルタにある Lembaga Penelitian Lant を除いてすべてボゴールの植物園内およびそのまわりにあります。私がたえず出入りするの、これらのうちの Kebun Raya と Herbarium Bogoriense です。LBN に属するということは自動的に LIPI の世話をうけることになり、したがってビザの延長手続き、通関手続きなどに関しては LIPI の国際部が書類をつくってくれます。

LBN の Director は Prof. Dr. Otto Soemarwoto で、彼は本来は植物生理学者としてカリフォルニア大学で Ph. D をとり、帰国後、前 Director の Ir. Soetomo (現在、主に植物生理学方面の研究をおこなう Lembaga Penelitian Botani の Director) のあとをうけて、LBN のきりもりをおこなっています。彼は同時に SEAMEC (South East Asian Ministers of Education Council) の Regional Center for Tropical Biology (BIOTROP) の Director としてその組織づくりに余念がありません。彼の忙しさは実に殺人的で、たえずタイ、マレーシア、シンガポールの会議に往復しています。

Kebun Raya の園長はハワイ大学 Ph. D の anatomist, Dr. Didin で、彼はまた LIPI の Secretary Djenderal として火曜日以外は毎日、ジャカルタの LIPI 本部へかよっています。したがって、Kebun Raya の実務は副園長格の Ir. Saleh がとっています。彼もアメリカのフロリダ、ルイジアナ両大学で園芸を学んだ人です。

Kebun Raya に職をもつ人は、大部分園内にある小ぎれいな官舎にすんでいます。また、ゲストハウスもあって、Director の許可のもとに滞在できるようになっています。植物園はボゴール以外に Tjibodas, Purwodadi, Bali, Padang の4カ所あり、これらもすべて LBN の管轄にあります。

ボゴールへきて最初に Herbarium で会ったのは Dr. Prijanto でした。彼は28才、イギリス Edinburgh 大学で Ph. D をとり、その後ストックホルムへわたって Prof. Ertmand に師事して pollen grain の研究をおこない1968年の2月帰国して以来、Forest Research Institute につとめるかたわら、毎日 Herbarium で、自分の研究をしていました。中部ジャワ出身の彼も、すでにインドネシア国籍になっているオランダ人分類学者 Dr. Kostermans の数多い養子の一人です。Dr. Kostermans はインドネシア中からめぐまれない優秀な子供を見つけてきては養子にし、それぞれの性格にあった道に進ませている60才のタカのようなすどい目をした老大家で、彼の養子はすでに30人を越しています。その中には現在、Herbarium の Curator をしている Dr. Rifai、この出版物 Reinwardtia の Editor でハーバード大学をでた Dr. Soegeng、バンドン工科大学の生態学者 Dr. Soeriaatmadja、マレー大学に講師として滞在している Dr. Soepadmo などがいます。Dr. Kostermans の家にはまだ中・高校生のはつらつたる少年が数人いますが、これらの少年達の養育費をかせぐために、彼は1～2年に1度は海外へ客員教授としてでかけます。

インドネシアへくる前に立ち寄ったマレー大学で Dr. Soepadmo に聞いた最初の名前が Dr. Prijanto であったこと以来、私と彼とはたえず会って議論し、彼の豊富な調査経験をもとに、われわれの今後のプランを共にたてていたところ、突然、彼がマカッサルで交通事故にあって亡くなったと聞いた時はいっしょん、我が耳をうたがいました。彼はオーストラリアからの2人の FAO 調査員を案内してスラウェシへ *Eucalyptus* の調査にいった帰りに事故にあい、彼とオーストラリア人1人は即死、もう1人は意識不明の重態ということでした。

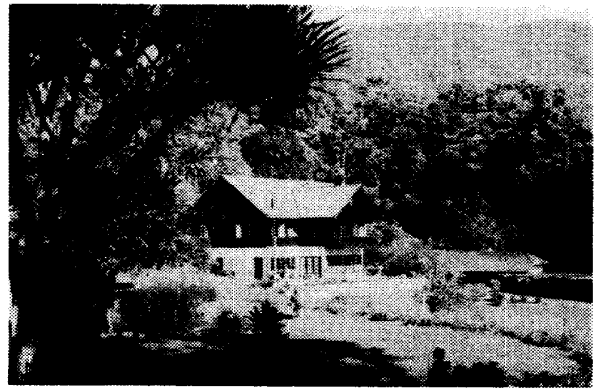


写真 2 チボダス高山植物園

個人的に最良の友人を失った悲しみはもちろんのこと、インドネシアにとってもまたインドネシアへ今後やってくるであろう調査隊のためにも彼の死は大きな損失であることにまちがいありません。それは彼がインドネシアでは実に数少ない動ける身の人間だったからです。ボゴールだけでもアメリカやヨーロッパで教育をうけた優秀な学者は相当みられますが、その大部分が本来の研究に従事せず、ただ administration にのみ時間をとられているのが現状です。そういう中であって Dr. Prijanto は数少ない実験材料と、ほとんどないに等しい研究資金の悪条件のなかで、いつもこつこつと研究していました。本来の仕事がおわっての帰りに Herbarium へ寄り、自分の研究を地道につづける彼の姿がみられないのはさびしいことです。

ウジュン・クロンの自然

ジャワ島の西海岸につきでた半島とその先にあるパナイタン島およびその周辺の島々を含めてウジュン・クロンと称し、自然保護区域としてインドネシア林野総局自然保護野生動物管理課の厳正な保護がなされています。ここはジャワの低地で唯一とっていい原生林の保護されている地域であり、その41,120ヘクタールにおよぶ地域にはジャワサイ、トラ、野牛、シカ、クジャクなど数多くの動物

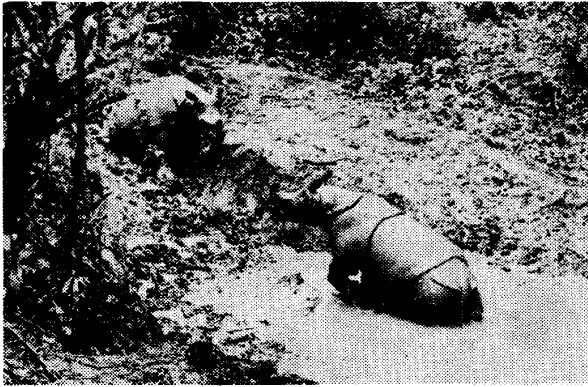


写真 3 ウジュン・クロンのジャワサイ

が棲息しています。この地域がかくも嚴重に保護されてきている理由はジャワサイ (*Rhinoceros sondaicus*) が現在ではここだけにしか棲息しないことによります。

この地域は1921年にはじめて厳正自然保護地域として指定され、1967年にはWWF (World Wildlife Fund) が調査隊を送り、すでに30頭に満たないジャワサイ保護の必要性が再認識され、保護がより強化されつつあります。すでにWWFは地域内のプチャン島に調査基地を設け、サイの密猟を見張る要所要所に人をおいて万全を期しています。本来は林野総局がこの管理を行なうのですが、現在のところWWFがすべてを動かしている形になっています。この任務をまさにこつぱしるサイのごとく遂行するのがスイス・バーゼル大学のProf. Dr. Schenkelです。

彼の専門はAnimal Behaviorで、すでに東アフリカでサイの研究をおこなっており、その後こちらへやってきたわけで、1967、68年に各々7カ月間このウジュン・クロンに滞在し、ジャワサイおよびここに棲息する動物の生態を研究し、それをもとに、実際のサイ保護の方策をたてています。彼によりますと、この地域に棲息するサイの数は20頭から30頭、そしてこの1年間に2〜3頭のわりあいふえているから、このままの状態、つまり密猟がない状態が続けば、地球上で最も棲

息数の少ないこの貴重な動物も生存しつづけることができるだろうということです。彼とともに、バーゼル大学の動物学教室の学生もやってきてすでに専門分野を研究し、今年の予定としては、サルと野牛の研究に半年ばかり2人の大学院学生がくることになっています。

珊瑚礁にかこまれた美しいプチャン島から約500m先にウジュン・クロンの半島部があり、最高峰のパユン山は深い原生林におおわれています。しかし、低地林およびプチャン島の森林は1883年のクラカタウの爆発の影響をうけたため、それ以後の比較的新しい森林です。その低地に繁茂するサラック、ロタンなどのヤシ類のトゲはものすごく、人の通行を許しません。1カ所だけある草原には展望台が作られ、草原にあそぶ野牛やクジャクなどの生態が観察できます。森の中を歩いていると30mくらい前をクジャクが歩いていたたり、また突然藪から野牛がとび出したり、野豚がにげていったりします。また実際に姿はみせませんでしたがサイの足跡やぬた場には度々出会います。宿舎のあるプチャン島には鹿が棲息し、夜になると森からでてきて宿舎前の広場で草を食べます。われわれは食料獲得のため、毎夜プラウにのって夜釣りにいくのですが、日本では魚などつれたことのない私にも1晩で大小10匹くらいつれます。熱帯の海はあくまで青く、珊瑚礁のまわりを実に様々な原色の魚がおよぎたわむれています。ボゴールから半日車で西海岸のラブアンへ、ラブアンから約8時間の船旅でつくこのウジュン・クロンはまさに熱帯の自然をそのまま残しているといえるでしょう。

熱帯植物を研究する目的でこの国にやってくる植物学者はチボダス高山植物園で山地林をみて、ボゴールで腊葉を調べ、そして、低地林としてはサバ、サラワクへいきます。カリマンタンやスマトラの低地林では2〜3カ

月ではとても効率よく仕事ができないため、すでにかなり仕事になされ、主にイギリス人を中心にした基地もあり、有能なガイドもいるマレーシア側へいくわけです。

今年の10月から3カ月の予定でおこなわれる British Museum のスラウェシ調査も、すでに計画がおこって10年になるといわれます。発起人の Dr. Kostermans によれば、スラウェシを選んだ大きな理由は未調査地域であることはもちろんだが、それ以上に現地関係者を個人的によく知っていたからだといいます。おそらくこれはこの国全体を通じていえることで、外領へいくのは他国へいくに等しいという言葉もうなずけます。

ウジュン・クロンはかつてはライフ誌に紹介されたり、ユネスコ調査隊がきたりしましたが、現在は、WWF 以外はあまり訪れる人もないようです。ということは、もし WWF がこの保護から手をひけば、また昔の状態にもどり Dr. Schenkel が懸念するようにジャワサイは絶滅する可能性が充分にあります。このウジュン・クロンと同様に、ジャワのも

う一つの自然保護地、チボダス植物園を中心にしたゲデーパンゲランゴ山塊も、厳正保護地に指定されていないすぐ近くの山すそがすでに材木業者によって伐採され、頂上へむかってのびていくのがみえます。日本でさえも原生林保護があればほどむつかしいのに、ましてやこの国ではよほど力を入れて自然保護という観念をうえつけ、制度にはめこまない限り徹底することはむつかしいでしょう。

おそらく生物学のあらゆる分野において、最も重要でかつ興味深いと思われるこのインドネシアが政治的な理由で各国の科学者に敬遠されているのは実に残念なことといえましょう。国立生物学研究所を中心にしたスタッフの努力によって、最近特に国際協力による運動が盛んになりつつあります。この国が今までのような困難なしに能率よく仕事ができるようになるのもそう遠いことではないようです。

なお、本稿の写真は国立生物学研究所の好意により提供されたものです。